

妊娠中の母体へのワクチン接種と児の COVID-19 による入院予防効果

Maternal vaccination and risk of hospitalization for Covid-19 among infants.

Halasa NB et al : Overcoming Covid-19 Investigators

N Engl J Med 387:109-119, 2022

背景 生後6カ月未満の乳児は COVID-19 による合併症のリスクが高いが、ワクチン接種の対象ではない。母体への COVID-19 ワクチン接種により、SARS-CoV-2 に対する抗体が経胎盤的に移行することで、児の COVID-19 予防に効果があるかもしれない。

方法 妊娠中の母体ワクチン接種が、6カ月未満の児の COVID-19 による入院を予防する効果があるのかを調べるため検査陰性症例コントロール研究を行った。2021年7月1日～2022年3月8日に、米国内22の州にある30の病院に COVID-19 のために入院した児（症例群）とそれ以外の理由で入院した児（対照群）を対象とし、妊娠中に2回のワクチン接種を完了した群と、ワクチン接種を行わなかった群のオッズを比較してワクチンの有効率を算出した。なお、2021年7月1日～2022年12月18日をデルタ株流行期、2021年12月19日～2022年3月8日をオミクロン株流行期とした。

結果 症例群 527 人中 87 人 (16%)、対照群 512 人中 147 人 (29%) が妊娠中の母体ワクチン接種を受けていた。症例群では、113 人 (21%) が集中治療を受けており、2 人が死亡していた。死亡した児の母体はどちらもワクチン未接種であった。6カ月未満の児の COVID-19 による入院の予防に関して、母体ワクチン接種の有効率は全期間では 52% (95%CI : 30-65)、デルタ株流行期では 80% (95%CI : 60-90)、オミクロン株流行期では 38% (95%CI : 8-58) であった。妊娠 20 週を超えてのワクチン接種の有効率は 69% (95%CI : 50-80) で、妊娠 20 週以前のワクチン接種の有効率は 38% (95%CI : 3-60) であった。

結論 妊娠中の母体ワクチン接種は、6カ月未満の児の COVID-19 による入院と重症化のリスク軽減に関連している。

(京都大学 山口綾香 抄)

助産師 2 名による分娩第 2 期介助は重度会陰裂傷を軽減する：スウェーデンでの多施設共同ランダム化比較試験

The effect of two midwives during the second stage of labour to reduce severe perineal trauma(Oneplus) : a multicentre, randomised controlled trial in Sweden.

Edqvist M et al

Lancet 399:1242-1253, 2022

背景 肛門括約筋群に影響を及ぼす重度会陰裂傷は分娩後の重大な合併症であり、短期および長期母体罹患率と関連する。しかしながら、現状では効果のある予防策は少ない。本試験は、重度会陰裂傷予防のために、分娩第 2 期に助産師 1 人で介助するより 2 人でするほうが、肛門括約筋に影響を与える損傷が少なくなるという仮説を検証した。

方法 スウェーデンの 5 つの産科病棟で多施設共同非盲検ランダム化比較試験が行われた。対象者は、分娩第 2 期の後半に助産師 1 人（標準ケア群）または 2 人（介入群）が介助するようランダムに割り付けられた。18～47 歳の初産婦を、陣痛第 2 期に達した時点で 2 群に割り付けた。選択基準に 37 週以上、頭位、単胎妊娠、スウェーデン語・英語・アラビア語・ペルシャ語のいずれかに堪能であることを設けた。除外基準は多胎妊娠、子宮内胎児死亡、予定帝王切開、妊娠 37 週未満とした。2 群への割り付けはコンピュータベースのプログラムで行った。対象者と助産師は群分けを認識していたが、分析を行った統計学者には、群分けの情報は通知されていなかった。助産師は従来の介助法を実施するよう指示され、2 人目の助産師は依頼があれば 1 人目の助産師の指

示をもとに補助するよう指示された。さらに、分娩助産や会陰部損傷の予防に用いた技術について報告書に記入するよう指示された。主要評価項目は、重度会陰裂傷の割合とし、オッズ比および 95%CI を算出した。すべての解析は intention to treat に従って行われた。

結果 2018 年 12 月 10 日～2020 年 3 月 21 日に、8,866 人が対象者として検討され、そのうち 4,264 人が選択基準を満たし参加に同意した。4,264 人のうち 3,776 人 (88.5%) が、分娩第 2 期に達した後に 2 群に割り付けられた。1,892 人が陣痛第 2 期に 2 人の助産師で介助され、1,884 人が 1 人で介助された。各群で 13 人の女性が選択基準を満たさないため除外された。最終的に介入群で 1,546 人、標準ケア群で 1,513 人が自然分娩となった。主要評価項目の intention-to-treat 解析には介入群 1,546 例、標準ケア群 1,513 例を組み入れた。介入群で、重度会陰裂傷が有意に減少していた [3.9% (1546 例中 61 例) vs 5.7% (1513 例中 86 例) ; 調整オッズ比 0.69 (0.49-0.97)]。

解釈 分娩第 2 期後半における助産師 2 名による分娩助産は、初産婦の重度会陰裂傷を減少させる可能性がある。

(京都大学 上田優輔 抄)